

## 日本語教育でのコンピューター利用について ③

## 天理大学 CALL 教室

筆者は現在、天理大学の非常勤講師として、留学生の基礎日本語（会話）の授業を担当している。依頼を受けた当初、地域文化学科日本研究コースの先生から CALL 教室で授業を行うかと尋ねられ、どのような教室なのか、どんな機器があるのかも知らず、戸惑った。しかし、とても興味はあった。今までやってきたことが役に立つのだろうかとも感じた。結局、授業が始まる前の3月に実際に機器に触れ、説明を受けて使わせてもらうことになり、天理大学4号棟地下のCALL教室へ何度も足を運んだ。ここは昔、LL教室として使われていた教室だ。教育研究支援課分室にはCALLシステムの提供をしているCHIERU株式会社の方々が常駐し、授業での利用や機器の操作についてもサポートしてくれる体制になっている。こちらが授業を進める上で、この練習にはこの機能を使えばいいのではないかとアドバイスをくれたり、授業で行いたい希望を伝えれば、それに合う方法を考えてくれたりしてくれた。昔、LL教室であったところが、このように大きく変わっているとはまったくの驚きだった。



写真 天理大学のCALL教室

これに合う方法を考えてくれたりしてくれた。昔、LL教室であったところが、このように大きく変わっているとはまったくの驚きだった。

## CaLabo EX

CALL教室に入り、大学から与えられているIDとパスワードを入力しログインすれば、出席管理、機器の一斉操作ができるようになっており、天理教語学院でコンピュータールームを整備していた頃と比べると、雲泥の差がある。また当時、こんなシステムがあればいいなあと思っていたことも実現されていて、ここまで機器は進歩していたのかと驚きを隠せなかった。少し紹介するとログイン後、画面上の「CaLabo EX」のアイコンをクリックするとログインしている学生の一覧が表示され、各学生の画面がアイコンサイズで表示され、何をしているかわかる。学生が勝手にブラウザを開いてWEBページを見ても教師側の操作でWEB閲覧禁止もボタン一つで操作できる。また学生同士をランダムに2人ペアにして会話の練習をさせたり、課題を与えて3人以上のグループを作り、課題の答えを相談させて答えを考え出したりする活動も行える。また全員に発表を聞かせたりもできる。このような機能は、筆者が研究してきたヴィゴツキーの唱える社会的構成主義の学習理論を、CALL機器を用いて具現化しているとも言える。語学教師がアナログで考え出してきた授業方法を、デジタル機器を使い実践できるようになったとも言える。具体的な例を挙げると、教室で学生に5人のグループになってもらい、「一つのテーマについてお互いに意見を出し合って、あとで結果を発表してください」という課題が、ボタン操作だけで即座にグループを作り、すぐに始めることができるということである。イスを持って席を移り、丸くなってグループを作る必要もなく、教師のパソコン

のモニター上で即座にグループを作り、話し合いに入っているというわけである。教師はヘッドセットを付けて、各学生が話し合っていることをモニターすることもでき、インカム機能を使って、その会話の中に割り込んでいくことも出来て、発音などの指導をすることもできる。

## ムービーテレコ

「CaLabo EX」はCALL教室全体を制御するシステムであるが、これ以外にも「ムービーテレコ」というソフトがあり、これでマルチメディアを使った授業を行うことができる。最近では教材にMP3形式の音声ファイルが付いている場合などもあるが、それらを取り込み、すぐに再生することもできる。音声ファイルだけでなくビデオなどの映像ファイルも再生できるので、教師がUSBスティックメモリなどに教材ファイルを入れておき、CALL教室に入って、すぐにそれらのファイルをムービーテレコに取り込み、授業で活用することもできる。また録音機能もあるので、教材の音声を聞きながら、発声していくシャドーイングなどもでき、録音モードにしておけば学生の声が録音され、その後、一斉に回収してUSBメモリにコピーして持ち帰り、自分のパソコンで再生し、後でチェックすることもできる。まさにそれがあれば便利だと思う機能が詰め込まれているソフトであると感じる。

## 機器をどう使いこなすか

「CaLabo EX」「ムービーテレコ」などCALLシステムを紹介したが、これらのソフトには他にもチャット機能などもあり、学生相互に文字で会話することもできる。筆者が19年前に天理教語学院でコンピュータールームの活用を考えていた頃に、こんなことができればいいなあと思っていたことが実現しているようで、時代の流れに驚くと共に機器の進化の速さをあらためて実感した。教育研究支援課分室の職員の方に機能の説明を受け、実際に授業で操作して感じたことだが、授業を担当する教師と機器のサポートをする職員が、よく話し合い連携して授業を作り上げていくことがやはり重要である。なぜなら、コンピューターが専門でない教師はいろいろな説明を聞いても漠然と理解しているケースがあり、職員は機器の機能や操作については詳しくても、教師がどんなことを授業で行いたいのか、授業活動のどの場面で、どの機能を使うべきなのか、話を聞かなければ判断できないからである。またコンピューターに苦手意識を持った教師は、CALL教室でどんな授業を展開していけばいいのか、イメージすらできていないこともあるように思う。ややもするとこれだけ便利な機器なのに、一部の機能しか使わず、宝の持ち腐れのようなことも起こりかねない。その点、天理大学の教育研究支援課分室には常駐の職員がいて、サポート体制がしっかりしていると感じる。筆者もしつこく質問したり、こんな活動をしたいので、その場合にはどんな機能を使えばいいかと、授業内容を説明し、それに対し一つひとつ対応してくれたので助かった。筆者はまだ数ヶ月間、授業でCALL教室を利用したに過ぎないので、すべての機能を理解し、効果的に授業が行えているのか疑問にも思うが、さらにアイデアを出し、活用していきたい。